

国立国会図書館

第33回関西館資料展示

At the end of endless imagination

果しなき

想像の

果に

—SFの想像力が創造した未来

展示資料解説



未来を夢見るはてしなき想像力と、その夢を実現する科学技術によって、人類は社会を発展させてきました。本展では、想像の世界を描くSF小説と現実の科学技術に関する資料を対比させながら、宇宙技術やインターネットといった革新的な技術、万博やけいはんな学研都市のような社会実験となったプロジェクトなど、幅広いテーマの資料をご紹介します。人類の想像力と科学技術が生み出した社会の変容をたどることで、現代社会が抱える課題の解決のヒントを探ります。

未来を創造する力は、一人ひとりの想像力の中にあります。想像力を刺激し、新たな視点から社会を見つめ直すきっかけとしませんか？

目次

§ 1 想像力の中の日本	p.1
§ 2 SFの誕生	p.5
§ 3 夢見る時代	p.14
§ 4 宇宙への進出	p.19
§ 5 SFが現実になる時代	p.27
§ 6 大阪万博から学研都市へ	p.33
§ 7 未来を切り拓く	p.41

凡例

- ・展示の順番にしたがって資料の情報を掲載しています。
- ・書誌情報は「タイトル / 編著者名等． 出版者， 出版年」の順に記載しています。【 】内は資料の請求記号です。
- ・★印の資料は、国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます。公開範囲は資料により異なりますが、館内の端末からはすべて閲覧可能です。
- ・×印の資料は、原本を会場に展示していません。国立国会図書館デジタルコレクションをご覧ください。

<★印・×印の資料を閲覧するには>

- ・国立国会図書館サーチ (<https://ndlsearch.ndl.go.jp/>) で、ご覧になりたい資料の請求記号やタイトルなどにより資料検索を行い、検索結果の画面で「収録元データベースで確認する」のボタンをクリックしてください。
- ・または、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>) で、ご覧になりたい資料の請求記号やタイトルなどにより資料検索を行ってください。
- ・各資料の公開範囲は、書誌事項の後ろに付した以下の表示をご確認ください。

インターネット公開

インターネット上で閲覧が可能な資料です。ご自身の端末（スマートフォン、タブレット、パソコン）などで閲覧できます。

館内／図書館・個人送信

国立国会図書館の館内の端末、および図書館向けデジタル化資料送信サービス¹に参加している図書館の端末で閲覧が可能な資料です。個人向けデジタル化資料送信サービス²をご利用の方は、ご自身の端末（スマートフォン、タブレット、パソコン）などでも閲覧できます。

国立国会図書館内限定

国立国会図書館の館内の端末でのみ閲覧が可能な資料です。

¹ “図書館向けデジタル化資料送信サービス”。国立国会図書館。
https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/index.html

² “個人向けデジタル化資料送信サービス”。国立国会図書館。
https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/individuals_index.html

19世紀以前の西洋社会において、日本は謎に包まれた未知の世界であり、人々の想像力をかきたててやまない国でした。当時の西洋人が描いた日本を舞台にした空想的な著作は、異文化に対する人間の好奇心と創造性を映し出しています。§ 1では、そうした作品とその周辺資料を紹介することで、異なる文化と社会に対する人間の想像力というテーマを探求します。

1 Voyages de Marco Polo. 1291-1295 [74-116]

13世紀、ベネチアの商人マルコ・ポーロの、30年にわたる東方旅行中の見聞をまとめた旅行記である。物語作者ルスティケロにより筆録された。様々な言語に翻訳され、数多くの写本が残されている。

日本では『東方見聞録』という題名で知られ、元（げん）朝の世祖であるフビライ・ハンの支配下にあった、当時のユーラシア大陸各地域の様子が詳しく描写されている。

この旅行記の中で、日本は「黄金の国」として初めてヨーロッパに紹介された。

2 マルコ・ポーロ東方見聞録 : 全訳 : 『驚異の書』 fr.2810写本 / マルコ・ポーロ [著], 月村辰雄, 久保田勝一 本文訳, フランソワ・アヴリル, マリー=テレーズ・グセ 解説, 小林典子, 駒田亜紀子, 黒岩三恵 訳. 岩波書店, 2002.3 【GE84-G6】

フランス国立図書館所蔵のfr.2810写本『驚異の書』所収の、中世フランス語版『東方見聞録』の全訳である。写本は贈り物用の豪華本で、色鮮やかな挿絵が多い。

日本国「サパング」は金を限りなく所有し、建物の屋根や床はすべて純金で覆われていると描写されている（pp.147-148）。こうした日本の描写はヨーロッパ人に強い印象を与え、後にコロンブスがアメリカ大陸到達を果たす航海のきっかけともなった。

サパング征服をもくろんだフビライが將軍を派遣したが失敗に終わったという、日本側の歴史では元寇（げんこう）として知られる出来事についても述べられている。挿絵には日本の王や射手たちも登場するが、想像で描かれているため、日本人の目から見るとなんとも奇妙な姿である。

3 マルコ・ポーロ : 『東方見聞録』を読み解く (世界史リブレット人 ; 35) / 海老澤哲雄 著. 山川出版社, 2015.12 【GK547-L15】

『東方見聞録』の記述を深く読み解き、マルコ＝ポーロの人物像を考察した本。

『東方見聞録』にはマルコ＝ポーロ自身に関する記述は少ないが、宮廷事情に関する記述の詳細さから、彼が実際に宮廷内に地位を持っており、それが複数世代にわたって仕える近侍「ケシク」であったと推定する。また、フビライがキリスト教に関心があったかのような記述や、マルコ＝ポーロ自身が新兵器の使用をフビライに献策したといったエピソードは、ヨーロッパの読者を意識した作り話を含む可能性が高いと指摘する。

★4 日本伝聞記 / ベルンハルドゥス・ヴァレニウス [著], エルンストークリスティアン・フォルクマン 独訳, マルティン・シュヴィント, ホルスト・ハミッチュ 編注, 宮内芳明 訳. 大明堂, 1975 【GB391-73】

館内／図書館・個人送信

1649年に出版された、ヨーロッパで最初の総括的な日本の地誌研究書。著者はドイツ生まれの地理学者ヴァレニウスで、著書『一般地理学』により近代地理学のさきがけとなった人物でもあった。

本資料は『東方見聞録』《資料番号2》を含めた多くの文献を基に、日本の歴史や政治、生活習慣に至るまでを幅広く紹介している。実際に足を運ぶことなく書かれたものではあるが、荒唐無稽な記述は意外に少ない。

5 フォルモサ台湾と日本の地理歴史 (平凡社ライブラリー ; 913) / ジョージ・サルマナザール 著, 原田範行 訳. 平凡社, 2021.2 【GE461-M39】

6 An historical and geographical description of Formosa ... Giving an account of the religion, customs, manners &c. of the inhabitants. Together with a relation of what happen'd to the author in his travels; particularly his conferences with the Jesuits, and others, in several parts of Europe. Also the history and reasons of his conversion to Christianity, with his objections against it (in defence of paganism) and their answers ... By George Psalmanaazaar / . R. Holden, 1926 【915.29-P974h】

18世紀に刊行された、フォルモサという東洋の国を紹介するという体の偽書。

「フォルモサ」は現在の台湾の別称でもあるが、本資料で登場するフォルモサはそれとは異なり、天体を信仰し、幼児を生贄として捧げる習慣を持つ奇妙な国である。著者サルマナザールはこの国の出身者を自称するが、名前・経歴のすべてが詐称であり、正体は分かっていない。

フォルモサは政治的・文化的に日本と密接な関係を持つとされ、日本に関する記述も多い。特にキリスト教迫害を詳しく扱い、その結果としての鎖国、唯一の窓口「ナンガサク（長崎）」でオランダ人のみ出入りを許されるといった実際の事情を巧みに取り入れ、偽書ながらもある程度のリアリティを感じさせる。

後半は当時のキリスト教への批判がメインとなる風刺小説である。架空の国の旅行記をもって現実社会への風刺を行うスタイルは、のちの『ガリヴァー旅行記』にも通ずる。

7 『ガリヴァー旅行記』徹底注釈 本文篇 / スウィフト [著], 富山太佳夫 訳. 岩波書店, 2013.8 【KS131-L15】

8 『ガリヴァー旅行記』徹底注釈 注釈篇 / 原田範行, 服部典之, 武田将明 著. 岩波書店, 2013.8 【KS131-L16】

1726年刊行のイギリスの作家ジョナサン・スウィフトの風刺小説。日本では第1篇の小人国の話が広く知られるが、第2篇以降にも巨人の国、空飛ぶ国、馬の支配する国など様々な国が出てくる。

第3篇で、主人公は、不死の人間の住む想像上の国ラグナグから故国へ帰るため、ラグナグと交易のある日本に向かう。『フォルモサ』《資料番号5及び6》と同様、入国するためオランダ人を装ったり、「ナンガサク」から出航するといった、ある程度現実を反映した展開が見られる。当時のイギリス人にとって日本は、実在の国でありながらも、想像（ラグナグ）と現実（イギリス）の狭間のような存在であったのだろう。

本資料は『ガリヴァー旅行記』の本文全訳と、仔細な注釈を収めた2冊である。注釈では、主人公が日本に上陸した地「ザモスキ (Xamoschi)」は、当時海外で流通していた日本地図に記載されていた「下総 (しもうさ: shi-mo-sa)」を逆から読んだものという説などが紹介されている。

19世紀における自然科学の飛躍的な発展を背景に、科学の成果を取り入れた文学作品が登場するようになりました。近代科学を基盤とした想像力によって描かれた物語は、やがてSF（サイエンス・フィクション）と呼ばれるジャンルとして確立されます。§2では、時代の変革期における人間の想像力を示す資料と、SFの歴史に関する書籍を紹介します。

9 Vingt mille lieues sous les mers / Verne, Jules. Hetzel, [187-?] [78-39]

10 Le tour du monde en quatre-vingts jours / Verne, Jules. Hetzel, [187-?] [78-37]

ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』および『八十日間世界一周』のフランス語原著。資料に捺された受入印には「明治八年購求」とある。日本で初めてヴェルヌの作品が翻訳されたのは明治11（1878）年とされており、これらは翻訳に先立って輸入された資料である。

★11 世界大衆文学全集 第24巻. 改造社, 昭和4 [569-61]

館内／図書館・個人送信

ヴェルヌ『海底旅行』（『海底二万里』）とウェルズ『宇宙戦争』の合冊で、いわゆる円本（1冊1円の全集）ブームに乗じて刊行されたもの。序文からは、ヴェルヌとウェルズが当時から未来社会の予言者として捉えられていたことがわかる。

★×12 八十日間世界一周 : 新説 / シェル・ウエルヌ 著, 川島忠之助 訳. 川島忠之助, 明13.6 [26-212]

インターネット公開

当初は前後編として別々に刊行された書籍を合冊した資料で、前編は明治11（1878）年、後編は明治13（1880）年の刊行である。この前編が、日本で最初に翻訳されたヴェルヌの著書である。

イギリスの資産家とその執事の2人が、80日間で世界一周を成し遂げようとする冒険小説で、ロンドンを出発地とし、スエズ、カルカッタ、香港と当時の英領植民地を東回りに進んでいく。香港からサンフランシスコに向かう途中では横浜を経由しており、街の様子なども詳しく描かれている。本資料は、基本的にはフランス語原著からの忠実な翻訳だが、一部に英訳版で増補された箇所を独自に補填している箇所が見られる。1869年にスエズ運河が開通したことによって、理論上80日間で世界一周が可能になったという新聞記事に着想を得た新機軸の物語は、当時の日本人に大きな影響を与え、ヴェルヌの著書が盛んに翻訳されるきっかけとなった。

13 The war of the worlds / H.G. Wells. William Heinemann, 1898 【129-206】

H・G・ウェルズ『宇宙戦争』の英語原著。20世紀初頭に火星人が地球を武力侵略する様子を手記形式で綴ったSF小説。資料に捺された受入印には「明治三十一年十月四日購求」「帝国図書館蔵」とある。

★×14 九十七時二十分間月世界旅行 / ジュールス・ヴェルネ 著，井上勤 訳．黒瀬勉二[ほか]，明13-14 【31-160】

インターネット公開

『月世界旅行』として知られる2つの長編小説『地球から月へ』『月世界へ行く』のうち、前編にあたる『地球から月へ』の英訳からの重訳。砲弾の中に入れた人を入れ、巨大な大砲で打ち出して月面着陸を目指すという科学的ながらも突飛な発想は、子供たちの想像力を大いに刺激した。ツイオルコフスキーやオーベルトに代表されるように、のちのロケット工学者や宇宙飛行士には、幼い頃に『月世界旅行』を読んだことをきっかけにその道に進んだ者も多い。また、日本に留学していた中国の小説家、魯迅によって日本語からさらに中国語に重訳されたことも知られている。

★15 巨人の復讐 : フランケンシュタイン (世界大衆文学全集 ; 第11) / シェリー夫人 作, 山本政喜 訳. 新人社, 1948 [a933-42]

館内／図書館・個人送信

イギリスの小説家、メアリー・シェリーが匿名で出版したゴシック小説。科学者を志したフランケンシュタインは科学的野心から人造人間を創造するも、その醜さに絶望し怪物を残したまま故郷へ逃亡する。怪物は高い知性を持ちながらもその醜さから人々に迫害され、孤独と自らの存在に悩み、創造主への復讐としてフランケンシュタインの愛する人々を次々と殺害していく。

本資料のテーマは、現代の科学技術の課題と結びついている。例えば、クローン技術の誕生は生命創造の倫理的問題を提起し、人工知能の進歩は人間と機械の境界を曖昧にしつつある。こうした状況から生じる課題は、フランケンシュタインが直面した創造に対する責任、そして被創造物であり高い知性をもつ怪物の存在にも通じるところがある。科学技術がもたらす恩恵と脅威を考える上で示唆を与える物語ではないだろうか。

16 フランケンシュタインの精神史 : シェリーから『屍者の帝国』へ (フィギュール彩 ; 36) / 小野俊太郎 著. 彩流社, 2015.8 [KG381-L87]

『フランケンシュタイン』と日本SFの相関をさぐる文化論。前半は『フランケンシュタイン』が執筆された時代背景と作品の意図を解説し、後半では日本のSF作品との関係性を考察する。小松左京、光瀬龍、荒巻義雄、田中光二、山田正紀、伊藤計劃や円城塔への継承をたどる。

★17 第二十世紀予想論 (大日本文明協会刊行叢書 ; 第6編) / エイチ・ジー・ウェルス 著, 吉村大次郎 訳. 大日本文明協会, 明42.3 [78-98]

インターネット公開

原題は“Anticipations of the Reaction of Mechanical and Scientific Progress upon Human Life and Thought”。ウェルズによる20世紀の社会的及び技術的發展を予測しようとする試み。交通網の整備、都市化、戦争の様相、言語の覇権など、科学技術の發展が社会構造に及ぼす多岐にわたる影響が論じられている。

18 百年後の日本 / ジェーアンドジェー・コーポレーション, 2002.10 【EB98-H385】

大正9（1920）年に刊行された雑誌『日本及日本人』第780号の復刻。同号において「百年後の日本」という特集が組まれている。巻頭には、三宅雪嶺が「前路の展望」と題し、日本の未来像を論じた論文が掲載されている。次に、各界の著名人に実施した「百年後の日本」についてのアンケート調査の回答が掲載されている。未来のことなど分からないと回答を断る人もいる一方で、日米戦争を予見した回答もあるなど、100年後の未来である現在から見ると興味深い内容である。また、生田長江は「こんな問題に安んじてお答への出来るのは。現代の日本に言論の自由があると思つてゐる人々だけの事でせう。」と述べており、大正デモクラシーの最中とは言え、想像を語ることすら憚られた当時の時代背景が感じられる。

★19 十億年の宴：SF-その起源と発達(Key library) / ブライアン・W.オールディス 著, 浅倉久志 [ほか]共訳. 東京創元社, 1980.10 【KE173-44】

館内／図書館・個人送信

イギリスのSF作家・評論家、ブライアン・W・オールディスによるSF史。従来はガーンズバック、あるいはヴェルヌとウェルズに求められていたSFの源流を、メアリ・シェリーのゴシック小説『フランケンシュタイン』に求め、SFの歴史を語り直した。本資料が対象とする作品は1960年代のものまでとかなり古いが、のちに80年代までとした続編『一兆年の宴』（SF作家・評論家デイヴィッド・ウィングローブとの共著）が刊行されている。

20 ジュール・ヴェルヌとフィクションの冒険者たち / 新島進 編，私市保彦，フォルカー・デース，三枝大修，荒原邦博，識名章喜，石橋正孝，巽孝之，島村山寝，藤元直樹 執筆．水声社，2021.3 【KR139-M56】

ヴェルヌ及びヴェルヌに関連する作家の研究者が集まり開催されたシンポジウムでの議論を基にした論文集。今日では通俗的な作家としてのイメージが確立されてしまっているヴェルヌについて、文学史の正統として位置付けられる作家との比較や、ヴェルヌ以降の作家に与えた影響の検討を通じて、その作品群の文学的価値を再考している。

21 近代日本奇想小説史 明治篇 / 横田順彌 著．PILAR PRESS，2011.1 【KG381-J127】

横田順彌は小説家であり、日本古典SF研究の第一人者。江戸末期から昭和初頭にかけて刊行されたSF的要素を含む小説や文章を丹念に調べ上げ、著者独自の視点から捉え直したライフワーク的作品であり、『SFマガジン』に平成14（2002）年から平成20（2008）年にかけて連載された作品を加筆修正したもの。

22 日本SF全集・総解説 / 日下三蔵 著．早川書房，2007.11 【KG381-J1】

編集構成案のみが存在する架空のSF全集の解説書、という体裁のブックガイド。日本SFの土台を築いた作家の業績を一人ずつ、作家のデビュー順に三期に分けて紹介している。『SFマガジン』に平成11（1999）年から平成18（2006）年にかけて連載された作品を加筆修正したものである。

23 ジュール・ヴェルヌ伝 / フォルカー・デース 著，石橋正孝 訳．水声社，2014.6 【KR134-L3】

ヴェルヌ研究の第一人者による、ヴェルヌの中立的かつ実証的な伝記。日本で刊行された最初のヴェルヌの伝記でもある。本資料は、従来センセーショナルな人物像を与えられてきたヴェルヌについて、綿密な調査を通じてそれらの人物像を否定し、むしろ無個性で捉えどころがない点こそが特徴であるとする。なお、訳者の石橋正孝氏もヴェルヌの研究者である。

★×24 新未来記 / ジョスコリデス 著，近藤真琴 訳．青山清吉，明11.12 【4-152】

インターネット公開

オランダの博物学者・作家、ジオスコリデス（本名：ペーター・ハルティンク）による小説。本資料は慶應4（1868）年に訳稿が完成し、明治11（1878）年に刊行されており、近代日本における最初期の翻訳小説であると考えられている。哲学者ロジャー・ベーコン（バアコ）と“幻”（ハンタシー）という名の女性の2人に案内されて200年後の未来世界を見物するという物語である。未来世界の描写を通じて社会を論じる構成は、後続の未来小説・政治小説に大きな影響を与えた。

★×25 二十三年未来記 / 末広重恭 著．辻本文四郎，明19.12【特13-375】

インターネット公開

末広重恭は明治時代の自由民権派の新聞記者であり、政治家・政治小説家。明治19（1886）年、国会開設という期待と希望に充ちた4年後の明治23（1890）年に寄せる夢を描いた政治小説。朝野新聞に連載していた記事を刊行したもの。

★×26 星界想遊記 / 井上円了 著．哲学書院，明23.2【18-127】

インターネット公開

井上円了は明治時代の哲学者であり、東洋大学の創設者。明治23（1890）年、伊豆修善寺の温泉に宿泊していた円了は星界を巡る空想上の体験をし、

その旅の記録として本資料を刊行した。円了が星界である「共和界」「商法界」「女子界」「老人界」「理学界」を旅する中で、当時想定しえた、新時代の社会に対する思索を深める内容となっている。明治期のSF的小説として位置づける説もある。

★×27 三十年後 / 星一 著．新報知社，大正7【31-626】

インターネット公開

著者の星一（ほし はじめ）は、SF作家星新一の父であり、星製菓の創業者。30年間無人島で隠居生活を送っていた主人公が大正37年の東京に戻ると、菓の力で年を取らず、感情も抑えられ、争い事が起こらないので警察も軍隊も不要になった平和な世界になっていた。製菓会社のPRも兼ねているという性質上、素晴らしいユートピアとして描写されているが、少しでも感情をあらわにするとすぐに巡視官が来て菓を飲まされ、拒否すれば強制入院させられる、思想も感情も平均化された穏やかな世界は、現代の感性ではディストピアといえるのではないだろうか。

★28 世界SF全集 第4巻 （ガーンズバック, テイン）．早川書房，1971【KE211-13】

国立国会図書館内限定

ヒューゴー・ガーンズバック『ラルフ124C41+』・『ミュンヒハウゼン男爵の科学的冒険』、ジョン・テイン『鉄の星』の3作品を収録。

ガーンズバックはアメリカの発明家であり、雑誌編集者、SF作家。「サイエンス・フィクション」という言葉（Scientifictionという造語）の生みの親であり、1962年に世界初のSF雑誌『アメージング・ストーリーズ』誌を創刊したことから、「現代SFの父」と称される。『ラルフ124C41+』は、無線雑誌『モダン・エレクトリックス』誌で掲載予定だった記事が入稿されず、誌面を埋めるために編集者であったガーンズバックが執筆したSF小説である。

29 SF, 포스트휴먼, 오토피아 : 한일 SF 애니메이션으로 살펴보는 '우리 안에 온 미래' / 안승범 지음. 문학수첩, 2018.9 【EB98-K42】

著者のアン・スンボン氏は教員として韓国の大学に勤めながら、詩人・映画評論家としても活動している。本資料では、サイボーグなどのポストヒューマンに着目しつつ、韓国と日本のSFアニメで描写される未来のデジタル文明を文化社会学的観点から分析している。分析の対象となっているアニメは、『未来少年コナン』や『カウボーイビバップ』、『テラフォーマーズ』など、1970年代から現在にいたるまでの10作品である。これらの作品の分析を通じて、各作品に反映された人類が到達すべき理想的社会・オートピアの姿や、目指すべき未来社会について考察している。

30 내셔널리즘과 일본SF의 전쟁 : 파시즘·신흥종교·에반겔리온 / 최석진 지음. 그노시스, 2019.7 【EC211-K116】

これまで韓国に紹介された日本のSF作品について、同時代における日韓両国でのナショナリズムとの対抗関係に着目しつつ分析している。本資料では特に、平成7(1995)年に公開され社会現象となったアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』に注目している。『エヴァンゲリオン』へと続く日本のSF作品の根底には、ファシズムや新興宗教に対する批判・風刺という側面があると指摘している。

31 20世纪中国科幻小说史 = History of Chinese science fiction in the 20th century (南科人文学术系列) / 吴岩主编. 北京大學出版社, 2022.1 【KK384-C98】

20世紀中国SF小説(中国語で「科幻小说」)史の研究書。清代末期(1900-1911)、中華民国期(1912-1949)、中華人民共和国初期(1949-1966)、文化大革命終結後(1976-1990)、20世紀末(1991-2000)の全5章からなる。各章では、創作の土壌となった時代背景、SF

作品の発表状況、代表的な作家と作品を紹介。清代末期を中国SF小説の黎明期とみなし、梁啓超『新中国未来記』など9作品を同時期の代表作として挙げる。

32 跨海建橋：新时代中日科幻研究 / 孟庆枢，刘研 主编。吉林出版，2021.9 【KG381-C5】

日本と中国のSF作品に関する論考を収録した論文集。「小松左京特集」「日本SFとアニメ」「新時代の中国SFの展望」などの5章と、巻末附録「小松左京作品リスト」からなる。「小松左京特集」では、中国のSF作家である王晋康氏へのインタビュー記事「SFインタビュー：小松左京と中国SFの未来」をはじめ論考4本を掲載。

33 中国科学幻想文学館 上（あじあブックス；35） / 武田雅哉，林久之 著。大修館書店，2001.12 【KK384-G13】

34 中国科学幻想文学館 下（あじあブックス；36） / 武田雅哉，林久之 著。大修館書店，2001.12 【KK384-G13】

中国におけるSF（科幻）小説の歴史についての概略書。上巻では古代から清代後期までの「SF前史」と清末・民国期の作品について、下巻では新中国成立以降の大陸・台湾・香港の作品について紹介する。

§3 夢見る時代

電信・電話、航空機、ラジオ・テレビなど、新たにもたらされた技術は社会に大きな影響を与え、SF作家たちはさらにその先にある未知の世界や課題に想像力を巡らせ始めました。1940年代から1960年代は、科学技術の急速な発展と同時に新たな社会問題が浮上した時代でもありました。§3では、科学技術の発展により生じた社会問題を扱った資料と、それらに触発されたSF作品を並置し、科学技術の進歩が社会や創作活動に与えた影響を探ります。

35 昭和ちびっこ未来画報 = Futuristic Illustrations for Kids of the Showa Era : ぼくらの21世紀 / 初見健一 著。青幻舎, 2012.1 【UM84-J72】

主に1950年代から1970年代の間に、子供向けのメディアに掲載された「未来予想図」が収録されている。暮らし、交通、ロボット、コンピューター、宇宙、終末のパートに大きく分かれており、当時の空想、夢想、妄想に基づいた荒唐無稽な21世紀の世界を楽しむことができる。

現在の眼から見ると、過去に空想されたものの大半が実現しなかった「懐かしい未来」ではあるが、当時の子供たちが21世紀の未来に抱いていた夢と希望を感じ取ることができる。

36 昭和少年SF大図鑑 : 昭和20~40年代僕らの未来予想図 (らんぷの本。Mascot) / 堀江あき子 編。河出書房新社, 2009.7 【UM84-J32】

2009年、東京の弥生美術館において、「昭和少年SF大図鑑展」が開催された。本資料は、同館の学芸員によって編まれた資料である。

昭和20年代から40年代は、科学万能の未来世界を夢見た時代であった。本資料では、この年代の雑誌の表紙、口絵、挿絵に描かれた未来予想図を中心に、冒険科学絵物語やSFマンガなど、当時の画家たちの自由な想像力に

よって表現された、輝かしい未来の姿が紹介されている。超高層ビルの立ち並ぶ未来都市、ビルの間を走り抜ける空飛ぶ高速車、夢の超特急、さらには誰でも行ける宇宙といった、科学万能の空想の世界が描かれている。

37 SF・冒険・レトロフューチャー：ぼくたちの夢とあこがれ：昭和館特別企画展図録 / 昭和館学芸部 編。昭和館，2020.3 【KG381-M40】

昭和館は、戦中戦後の国民生活上の労苦を伝えていくことを目的とした国立の博物館。本資料は、「懐かしい未来＝レトロフューチャー」をテーマに少年文化の魅力を紹介する試みとして、令和2（2020）年に同館で開催される予定であった特別企画展の図録。なお、この企画展は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となった。

「空想科学（SF）の黎明」、「紙芝居・絵物語の世界」、「少年たちの未来予想図」の3章構成となっている。特に第3章の「少年たちの未来予想図」では、昭和30年代の雑誌カラー口絵などに数々の未来の世界を描き人気を博した小松崎茂（こまつざき しげる）の作品が紹介されている。

38 The car culture / James J. Flink. MIT Press, [1975] 【DL438-32】

著者は、交通論と比較文化の研究者。自動車文化の最先端であった20世紀初頭のアメリカ社会における自動車の普及に焦点を当て、アメリカの歴史をとらえ直している。第一次世界大戦までの初期の自動車産業とそれをとりまく環境、自動車産業を発展させたヘンリー・フォード（Henry Ford）とウィリアム・デュラント（William Durant）、その後の自動車と自動車産業がアメリカ文化に与えた影響といった内容で構成されている。かつてはアメリカ社会に変革をもたらす革新の力と考えられた自動車が、当時（1970年代）の社会では、産業、社会生活、経済、環境問題といった様々な分野において社会問題の発生源となっており、自動車文化から脱皮した新たな価値観が必要であると論じられている。

(翻訳) ★39カー・カルチャー : オートモビリティ小史 / フリンク
[著], 秋山一郎 監訳. 千倉書房, 1982.5 【DL438-119】

国立国会図書館内限定

★40 交通戦争 / 読売新聞社社会部 編. 東明社, 1962 【685-
Y752k】

館内/図書館・個人送信

昭和36(1961)年から昭和38(1963)年に読売新聞に連載された記事により、「交通戦争」という言葉が流行語となった。昭和36年の自動車事故による死亡者は全国で1万2千人以上、日清戦争の2年間の戦死者は1万7千人であり、年間の死者数としては自動車事故が戦争を上回っていることから「いまの日本は、日清戦争を上まわる戦争状態といえよう」と書かれている。

本資料では、悲惨な交通戦争の現状を具体的に示すとともに、事態が切迫しているという認識のもと、交通戦争を早く終結に導くための方策として、運転者や歩行者の心得、事故原因の究明、施設の改善、さらには行政の改革などに言及している。

★41 世界カーSF傑作選 (講談社文庫) / R.シルヴァーバーグ 他編.
講談社, 1981.4 【KS241-40】

館内/図書館・個人送信

海外作家による自動車文化を題材としたSFのアンソロジー。かつて人々が抱いていた自動車によるユートピア的な社会の到来という未来予想が、現実により否定された時代背景を反映して、排気ガスによる環境問題などを扱った作品が多く含まれている。

収録作のR・A・ラファティの『田園の女王』では、自動車ではなく電車が主たる交通機関となり、自然と文明が調和した、反自動車派にとっての理想的世界が描かれている。少数の自動車派は違法な密造車を乗り回し、反自動車派から敵視される。また、フリッツ・ライバーの『交通戦争』では、居住地域が区分された自動車愛好者と歩行者による命がけの壮絶な戦いが続く世

界を描いている。

★42 声の網 / 星新一 著．講談社，1970 【KH152-26】

国立国会図書館内限定

ショートショートの名手である星新一により、昭和44（1969）年に発表された長編小説。電話網とそれに接続されたコンピュータにより、各種サービスが実現した未来世界が描かれている。現在の音楽配信、ネットバンキング、遠隔医療に当たるようなネットワークサービスも登場し、年代的には電話網となっているものの、現在のインターネット社会を予見したような内容になっている。プライバシーの保護や個人情報の管理、ネットによる監視社会といった、現代の社会問題が、科学技術の進歩における明暗として表現されている。執筆当時は、家庭用コンピュータはなく、インターネットの起源にあたるARPANETがアメリカで構築されたばかりであった情報化社会の黎明期であり、本資料は著者の先見性を示すものといえる。

**★43 おれに関する噂 / 筒井康隆（掲載誌 小説新潮 26（8）
[（338）] pp.248-260 【Z13-627】）**

国立国会図書館内限定

昭和47（1972）年に発表されたSF小説。主人公は、電機工業の会社に勤める平凡なサラリーマン。ある日突然、テレビのニュース番組で、会社の同僚女性をお茶にさそって断られたことが報道される。その後もテレビ、新聞、ラジオ、駅の放送など様々なメディアで主人公の日常が詳細に報道され続けるが、マスコミでの報道がなくなった途端、主人公はただの人にもどってしまう。50年以上前に書かれた小説にもかかわらず、個人ニュースの突然の炎上、一瞬話題になったかと思うと、すぐ次の話題に大衆の関心が移り忘れ去られるという主人公をめぐる状況は、現代におけるSNSでの大衆の反応と共通する部分が見られる。

★44 鉄腕アトム / 手塚治虫（掲載誌 少年 7（4）pp.96-101

【Z32-375】)

国立国会図書館内限定

21世紀の未来を舞台に少年ロボット・アトムが活躍するマンガ。昭和27（1952）年から昭和43（1968）年にかけて雑誌『少年』に連載された。昭和38（1963）年から昭和41（1966）年にはアニメとしてテレビ放映もされ、人気を博した。

主人公のアトムは、10万馬力のパワーを備えると同時に、人間と同等の感情を持ったロボットとして描かれている。そのため、ロボットと人間との間で板挟みになり、苦悩することもある。「科学の子」であるアトムに科学万能の夢の未来を見るとともに、人間らしさとは何かについても考えさせられる。

★×45 ドラえもん / 藤子不二雄（掲載誌 小学二年生34（10）
pp.101-107 【Z32-359】)

国立国会図書館内限定

藤子・F・不二雄による漫画『ドラえもん』を掲載している。この話に登場するひみつ道具「オコノミボックス」は、四角い箱であればどんな道具にもなれる。作中では、テレビ、レコードプレイヤー、カメラ、洗濯機、ライター、冷蔵庫、冷暖房に変化する。この中のテレビ、レコードプレイヤー、カメラについては、現在ではスマートフォンとして実現されている。

東西冷戦下において、東西両陣営はそれぞれの国家的威信を懸けて熾烈な宇宙開発競争を繰り広げました。その舞台裏には、かつてSFを読んで宇宙に憧れ、宇宙開発を志したロケット技術者たちの存在がありました。§ 4では、SFが現実を動かし、夢を実現させていった過程を紹介します。

46 宇宙飛行の父ツィオルコフスキー：人類が宇宙へ行くまで / 的川泰宣 著。勉誠出版，2017.12 【GK552-L35】

ロケット工学の先駆者であったロシアの物理学者、コンスタンチン・ツィオルコフスキーの伝記。

ツィオルコフスキーは経済的に苦しい家庭に生まれたが、独学で物理学や天文学を学び、学校教師として働きながら、ロケットによる宇宙飛行の理論を打ち立てた。ロケット及び燃料の重量と到達速度、噴出するガスの速度の関係を定式化した「ツィオルコフスキーの公式」は、現在も宇宙航行の基礎となっている。

また論文執筆のかたわら、『月の上で』『地球の外で』などのSF小説を發表し、無重力空間での生活や宇宙旅行について、きわめて現実的な描写を行った。彼の著作は同時代にはあまり評価されなかったものの、後の宇宙開発競争時代に活躍した人々に強い影響を与えた。人類初の地球周回旅行に成功した宇宙飛行士ガガーリンもその一人である。

★47 ロケットと宇宙旅行の父：フォン・ブラウン伝 / 中正夫 著。刀江書院，1959 【289.3-cB82Nr】

館内／図書館・個人送信

ロケット工学者ヴェルナー・フォン・ブラウンの伝記。

彼は1912年ドイツに生まれ、第二次世界大戦時はドイツ陸軍でのV2ロケット開発に携わった。戦後はアメリカに渡ってロケット開発に参加し、「ロケットの父」と呼ばれた人物である。

本資料は1959年の刊行で、前年1月に行われたジュピターCロケットの成功について冒頭で触れており「フォン・ブラウンは、まだ四十七歳の働き盛りであり、これからも大きな宇宙への事業をなしとげる人」と評する。のちに、サターンVロケットによる初の有人月往復飛行（1968年）、アポロ宇宙船による初の月着陸（1969年）といった歴史に残る偉業に貢献した。

48 Die Rakete zu den Planetenräumen. R. Oldenbourg, 1923 【NC161-137】

ドイツのロケット工学者ヘルマン・オーベルトの著作。

オーベルトはツィオルコフスキーと並ぶロケット工学の先駆者である。ヴェルヌ『月世界旅行』やウェルズ『宇宙戦争』を読んだことをきっかけとして、人工衛星や液体燃料ロケットなどを中心とした宇宙工学の研究の道へと進んだ。本資料はその研究成果を出版したものの。いまだ液体燃料によるロケットの実現もみない当時であって、すでに電磁気的なエネルギーを利用したロケット原理を予見するなど、きわめて先駆的な内容である。

《資料番号47》には、この著作を入手した少年時代のフォン・ブラウンが、その内容を理解したい一心で猛勉強し、苦手だった数学を克服したというエピソードが述べられる。なおオーベルトとフォン・ブラウンとは、後にともにV2ロケットの開発などに関わった。

49 ロシア宇宙開発史：気球からヴォストークまで / 富田信之 著。東京大学出版会，2012.8 【NC161-J172】

旧ソ連の宇宙開発の歴史を述べた本。

まえがきによれば、宇宙開発競争時代について、アメリカ側のことは比較的知られているが、ソ連側についてはあまり体系的に紹介した書物がないため、本資料はその空隙を埋めるためのものとしている。ソ連時代の記録、回想録、文書などの膨大な資料を参照して、開発の歴史がつづられる。

著者は三菱重工業株式会社に長く勤め、国産ロケットの開発に携わってきた人物である。実際の施設を訪問して撮影した写真や、自ら描いたロケットの図が含まれている。また、ロケットの構造やテスト内容についての記述も非常に詳細で、技術者ならではの視点が感じられる。

★50 スプートニク : ソ連の人工衛星のすべて / ソ連文化省 編, 朝日新聞社 訳. 朝日新聞社, 1958 【538.09-R65s】

館内／図書館・個人送信

1957年10月4日、ソ連は人類最初の人工衛星スプートニク1号の打ち上げに成功し、その1ヶ月後にはライカという名前の犬を乗せたスプートニク2号を打ち上げた。この成功は全世界に驚きを与えたが、とりわけアメリカにとっては軍事的脅威と受け止められ、1960年代の米ソによる宇宙開発競争が激化するきっかけとなった。

本資料は、打ち上げ翌年に刊行されたスプートニクの解説書。ソ連科学アカデミーの研究者たちによる当時最新の学術資料が、豊富な写真や図解とともにまとめられている。冒頭には、1933年に録音されたツィオルコフスキーの言葉が掲載されている。

★51 地球の色は青かった : 宇宙飛行士第一号の手記 / ユーリー・ガガーリン 著, 朝日新聞社 訳. 朝日新聞社, 1961 【538.09-cG13t-A】

館内／図書館・個人送信

1961年4月12日、ソ連のユーリー・ガガーリンは人工衛星船ヴォストーク1号による人類初の地球周回旅行に成功した。本資料は地球への帰還直後の4月30日から6月までの間、彼がソビエト共産党中央委員会の公式機関紙『プラウダ』に特別寄稿した手記の全訳である。

第二次世界大戦下の故郷の思い出から、空軍士官学校へ進み、戦闘機パイロットを経て宇宙飛行士となるまでの半生を描く。学校のサークルの発表でツィオルコフスキーを研究テーマに選び、その著作を読み漁って宇宙への憧

れにとりつかれたエピソードなどが述べられている。

**52 Doroga v kosmos : zapiski letchika-kosmonavta
SSSR / ĪUrii Gagarin. Voenizdat, 1969 【GK437-17】**

1961年4月12日に人類初の宇宙飛行を経験した、ソ連のガガーリンによる手記『宇宙への道』の改訂増補版。ガガーリンの生い立ち、ワレンチナとの結婚、宇宙飛行の体験と地球への帰還、その後の生活などが書かれている。宇宙から見た地球の様子が149ページに書かれており、以下の日本語の訳本《資料番号53》では「地球は、うす青い色の円光につつまれていた。」と訳されている。

(翻訳) ★53 宇宙への道 / ユーリー・ガガーリン著、日本共産党中央委員会宣伝教育部訳。1961【538.09-cG13u-N】

館内／図書館・個人送信

**54 アポロとソユーズ : 米ソ宇宙飛行士が明かした開発レースの真実 /
デイヴィッド・スコット, アレクセイ・レオーノフ 著, 奥沢駿, 鈴木律
子 訳. ソニー・マガジズ, 2005.5 【NC161-H44】**

1960年代、宇宙開発にしのぎを削ったアメリカとソ連の宇宙飛行士による回顧録。

アメリカのデイヴィッド・スコットは1971年にアポロ15号船長として月面に降り立った人物、ソ連のアレクセイ・レオーノフは1965年にヴォスホート2号で人類初の宇宙遊泳を行った人物である。本資料は両者のインタビューを交互に配置し、二人の生い立ちから、1975年7月の米ソの宇宙船が共同飛行した最初の宇宙計画である「アポロ・ソユーズテスト計画」までを時系列順に追う。それぞれの国の違いや、厳しい訓練の日々、探査中の危機的トラブル、宇宙で目にした風景の美しさなど、当事者ならではの証言が

生き生きと綴られている。

★×55 最初の接触 (世界SF全集32) / マレイ・ラインスター 著、伊藤典夫 訳。早川書房、1969【KE211-13】

国立国会図書館内限定

アメリカのSF作家、マレイ・ラインスターによる短編。人類と地球外の知的生命体との初めての出会いをテーマとした、いわゆる「ファースト・コンタクト」SFの決定版とされる。

本作では、宇宙空間で出会った人類と未知の異星人とが、積極的な戦いは望んでいないにも関わらず、互いに相手の真意を信頼しきれないゆえに一触即発の事態に陥る。舞台は宇宙であるが、異文化との出会いに伴う困惑、拒絶など普遍的なテーマを描いた話でもある。

ラインスターは1919年からSFを書き始め、長編や短編集が30冊以上、他に1000編以上の中短編を著した。代表的なパルプ・マガジン（大衆向けの安価な雑誌）ライターである。

★56 ソラリスの陽のもとに (ハヤカワ文庫。SF) / スタニスワフ・レム 著、飯田規和 訳。早川書房、1977.4【KP256-13】

館内／図書館・個人送信

ポーランドのSF作家、スタニスワフ・レムによる長編。知性を持つ惑星ソラリスと人類の意思疎通の可能性を扱うファースト・コンタクトSFであるにも関わらず、全く異質な知性同士の交流は不可能ではないかという話題が中心となる点が異色。

本資料はポーランド語の原著からロシア語を介した重訳であり、その過程で文章の1割が検閲によって削除されている。現在ではポーランド語原著から直接翻訳された完全版が『ソラリス』と改題されて出版されている。

57 見知らぬものと出会う : ファースト・コンタクトの相互行為論 / 木

村大治 著．東京大学出版会，2018.9 【EC71-L132】

SFに描かれたファースト・コンタクトを分析することで、コミュニケーションの基礎について考える本。

著者は、アフリカ地域をフィールドとする人類学の研究者であり、「宇宙人類学」の提唱者でもある。宇宙人類学とは、言葉や文化の異なる他者に出会った時にどのような相互作用が起きうるかという人類学の考え方を拡張し、まったくの他者である宇宙人に出会った時にそこで起こりうる相互作用を考える学問である。

本資料では、『最初の接触』『ソラリスの陽のもとに』などのSF作品を多く引きながら、宇宙人は異質な存在のはずにも関わらず、我々は人間との共通点を中心としてその存在を想像してしまう（投射）と指摘する。さらに、そうした未知の相手とのコミュニケーションは何らかの規則性に基いて行われるはずであるという考察が展開される。

★58 2001年宇宙の旅：決定版（ハヤカワ文庫．SF） / アーサー・C・クラーク 著，伊藤典夫 訳．早川書房，1993.2 【KS153-E560】

国立国会図書館内限定

イギリスのSF作家、アーサー・C・クラークによる長編SF小説。

『2001年宇宙の旅』は、1968年に公開された映画で、監督スタンリー・キューブリックとアーサー・C・クラークが共同でストーリーを作成した。人類に進化を促す石板「モノリス」と、人類に反乱を起こしたコンピュータ「HAL9000」の謎をめぐる物語である。

人類初の月面着陸が行われる前年、宇宙旅行が実現間近な夢として人々の関心を集めていた時代に作られたこの映画は、専門家による詳細な科学的検証や、圧倒的な映像美もあいまって、独自の世界観を持つ超大作として話題となった。

クラークによる小説は、映画の小説化ではなく、映画製作と並行して書き進められた。日本では、映画公開と同じ1968年に『宇宙のオデッセイ

2001』という邦題で早川書房から刊行され、1977年に映画と同じタイトルに改めて再刊された。本資料は1993年の新訳版である。

★×59 火星人記録 (最新科学小説全集 ; 第10) / レイ・ブラドベリー 著, 斎藤静江 訳. 元々社, 1956 【933-cB79k2-S】

館内／図書館・個人送信

現在では『火星年代記』として知られる、アメリカのSF作家レイ・ブラドベリーの連作短編集の初邦訳。宇宙開発が発展し、火星の開拓が行われていく様子を、火星や地球の様子を描いた短編を積み重ねていくことで描き出す。星新一がSF作家を志すきっかけとなった作品としても知られている。

60 MOONSHOTS : 宇宙探査50年をとらえた奇跡の記録写真 / ピアーズ・ビゾニー 著, 佐藤健寿 監修, 藤崎百合 訳. 玄光社, 2019.2 【NC161-M4】

NASA (アメリカ合衆国航空宇宙局) が過去の宇宙探査で撮影した写真200点超を収めた写真集。本資料はアポロ11号の月面着陸から50年目の2019年に刊行された。宇宙空間や月面、宇宙船、探査機、宇宙飛行士の姿など、美しく鮮明な写真で、NASAの宇宙探査の歴史を振り返ることができる。

61 ビジュアル大図鑑宇宙探査の歴史 / ロジャー・D・ローニアス 著, 柴田浩一 訳. 東京堂出版, 2020.5 【NC161-M44】

古代から21世紀に至るまでの人類の壮大な宇宙探査の歴史を、豊富なビジュアル資料と解説で概観する図鑑。技術革新のみならず、アメリカとソ連の国際的な駆け引きや、各種のフィクションを通じて大衆が宇宙への興味をかきたてられていく様子などを、それぞれの時代背景とともに知ることができる。NASAとスミソニアン国立航空宇宙博物館が所蔵する写真資料を中心としつつ、当時の新聞見出しやSF誌、『2001年宇宙の旅』の映画ポスター

などの図版が掲載されている。

62 宇宙開発の50年 : スプートニクからはやぶさまで (朝日選書 ; 828) / 武部俊一 著. 朝日新聞社, 2007.8 【NC161-H110】

1957年の人工衛星スプートニクの打ち上げ以降、50年の間に打ち上げられた人工衛星や宇宙船を紹介した本。それぞれがどのように計画され、成果を上げたのか、こぼれ話も交えつつ紹介されている。打ち上げを記念した各国の切手の写真を豊富に載せているのが、類書にあまりない点である。

63 宇宙プロジェクト開発史アーカイブ / 鈴木喜生 著. EDITORS, 2022.5 【NC161-M84】

1897年から2021年までの各国の宇宙探査ミッションを時系列で紹介した本。

それぞれのミッションの様子を記録した写真と、ロケットの仕様や軌道などの詳細データ、簡潔な解説が掲載されている。また、宇宙探査の基本知識、各種の年表や、世界の宇宙計画と探査機リストなども充実している。

かつてSFの中で描かれた夢想的な技術は、宇宙開発を皮切りに、次々と現実の社会に実装されていきました。この時代、SF作家たちの想像力は科学者やエンジニアたちに刺激を与え、逆に科学技術の進歩がSF作家たちにさらなる創造の源泉を提供するという、相互作用的な発展が見られました。§5では、1960年代から1980年代にかけて、SFと科学技術が互いに影響を与えながら発展していった過程を探ります。

**★64 内宇宙への道はどちらか？ / J・G・バラード ; 伊藤典夫 訳
(掲載誌 SFマガジン38 (3) 1997.3, pp.27-31 [Z13-548])**

国立国会図書館内限定

イギリスのSF作家J・G・バラードは、エッセイ「内宇宙への道はどちらか？」で、現在のSFは宇宙探索に傾倒し過ぎているとし、SFは人間の内面を探查すべきであると主張した。この批判は、社会などの外的な変化が人間の内面に与える影響に注目し、SFを刷新しようとしたニューウェーブ運動の象徴となり、科学技術の発展による人間と社会の変容を描くサイバーパンク運動へと継承される。

★65 怒れ!電子計算機 / 高橋秀俊, 円谷英二, 星新一, 真鍋博, 米田信夫 (掲載誌 数学セミナー 2 (1) 1963.1, pp.8-15 [Z15-27])

国立国会図書館内限定

物理学者・計算機科学者の高橋秀俊、特撮監督の円谷英二、SF作家の星新一、イラストレーターの真鍋博、数学者・計算機科学者の米田信夫の5人による電子計算機をテーマとした座談会記事。昭和38(1963)年当時、自動翻訳機、機械による人間の脳の模倣、機械による絵画といったものが空想上のものとして挙げられているが、今やそれらは現実となっている。

★×66 自動翻訳 / 玉木英彦, 喜安善市 編. みすず書房, 1960

【549.9-Ta643z】

館内／図書館・個人送信

電子計算機を用いた自動翻訳に関する黎明期の論文を収めた学術書。ソ連と中国の論文が1編ずつ収められ、英露中の3言語間翻訳を扱っているのが特徴的である。冷戦下の東西両陣営は、互いの学術的成果を吸収するため競うように自動翻訳の研究を進めていたが、文中の端々に課題が山積している旨の記述もあり、理想と現実の間でもがく科学者のリアルな様子がうかがえる。

★×67 サイバネティックス：動物と機械における制御と通信 / ノーバート・ウィーナー 著，池原止戈夫，弥永昌吉，室賀三郎 共訳．岩波書店，1957 【401-cW64s2-I】

国立国会図書館内限定

生体と機械の間の通信と制御を統合的に行うことを目指し、著者が命名した「サイバネティックス」という新たな学問についての学術書。人体と機械の融合を科学的に考察している。本資料は、生物学・ロボット工学などに学術的な影響を与えたほか、創作の世界にもサイボーグという新たな創造物をもたらした。

★68 コミュニケーションの数学的理論：情報理論の基礎 / C.E.シャノン，W.ヴィーヴァー 著，長谷川淳，井上光洋 訳．明治図書出版，1969 【ND513-2】

館内／図書館・個人送信

情報という曖昧な概念を数学的・物理学的に定義し、情報通信（コミュニケーション）の数学的理論（情報理論）を創始した記念碑的著作。著者は現代の情報化社会に最も大きな影響を与えた技術者・科学者として知られている。

★69 電子計算機と頭脳 / ジョン・フォン・ノイマン 著，飯島泰蔵，猪股修二，熊田衛 共訳．ラテイス，1964 【535.54-cV94d-I】

館内／図書館・個人送信

著者は数学・物理学・計算機科学で多大な功績のある研究者。前半で電子計算機の原理や各モジュールの機能について解説し、後半では脳の各部分が電子計算機のどのモジュールに相当するのかを論じる。部屋を埋め尽くす巨大な計算機や、机より大きな英和翻訳機の写真なども掲載されており、視覚的にも楽しむことができる。

★×70 愛はさだめ、さだめは死 (ハヤカワ文庫。SF) / ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア 著, 伊藤典夫, 浅倉久志 訳. 早川書房, 1987.8 【KS172-195】

国立国会図書館内限定

アメリカのSF作家、ジェイムズ・ティプトリー・ジュニアの短編集。1973年に発表された「接続された女」には、脳神経を接続することで遠隔操作可能な「義体」が登場する。作中では、眉目秀麗な義体を使用している者の生活の中継放送、さらにはそれを利用したステルスマーケティングが行われており、現代の動画配信文化の予言と言える。

著者は覆面作家であり、洗練されたハードボイルドな語り口と破滅的な幕引きで知られ、その正体は男性であると断定されていたが、実は男性名を名乗る女性であった。その事実が発覚した際の混乱について、同時代のSF作家ロバート・シルヴァーバーグによる本資料の前書きで触れられている。

★71 ニューロマンサー (ハヤカワ文庫。SF) / ウィリアム・ギブスン 著, 黒丸尚 訳. 早川書房, 1986.7 【KS157-257】

国立国会図書館内限定

カナダ在住のSF作家、ウィリアム・ギブスンが1984年に発表した長編SF小説。あらゆる科学技術が極端に発達した近未来を舞台に、電脳空間で暗躍するハッカーを主人公とする。技術用語を説明なく多用する情報過多な文体を用いて、反体制的で退廃的な世界観、そして技術の発展がもたらす社会と人間の不可逆な変容を描く。当時はパソコンが一般家庭にも普及し始めた黎明期であり、本資料は時代を先取りした鮮烈な作品として瞬く間に話題と

なった。

最新技術がもたらす人間の内面の変容や、非西洋社会への関心に貫かれた作品群は、サイバーパンクと渾名され、SFの新たな潮流として捉えられた。日本においては、本資料で用いられた黒丸尚による独特な翻訳文体が特に知られている。「電腦空間」という言葉も、本資料をきっかけに急速に広まった。

★72 クローム襲撃 (ハヤカワ文庫。SF) / ウィリアム・ギブスン 著, 浅倉久志 他訳. 早川書房, 1987.5 【KS157-288】

館内／図書館・個人送信

『ニューロマンサー』で一躍時代の寵児となったギブスンの短編集。『ガンズバック連続体』では、1930年代に建てられた未来的なカリフォルニアの建物を1980年代に撮影するという行為を通じて、かつて人々が夢見たものの実現しなかった無数の未来の幻影が街に出現する様子を描く。「懐かしい未来＝レトロフューチャー」への郷愁とともに、自らが描くサイバーパンクすらもいずれ郷愁の対象となることを予言する。『冬のマーケット』では、東京から排出されたゴミで埋め立てて造られた「夢の島」をモチーフに、ゴミの山から立ち上がる芸術、技術によって可能になる芸術を描く。

73 ウィリアム・ギブスン 増補改訂版 (現代作家ガイド ; 3) / 巽孝之 編著. 彩流社, 2015.5 【KS217-L2】

ギブスン本人のインタビューやエッセイのほか、批評、作品ガイド、キーコンセプト事典、書誌を収めた研究書の増補改訂版。本資料は現代アメリカ作家のガイドブックシリーズの1冊であり、他にはトマス・ピンチョン、ポール・オースター、カート・ヴォネガットらの本が刊行されている。

★74 ディファレンス・エンジン / ウィリアム・ギブスン, ブルース・

スターリング [著], 黒丸尚 訳. 角川書店, 1991.6 【KS157-E222】

国立国会図書館内限定

サイバーパンクを代表する作家2人の合作による歴史改変SF小説。蒸気機関が異常に発展した19世紀ヴィクトリア朝イギリスを舞台とする。情報理論や複雑系など、最新の科学に関心を寄せつつ、虚実を混ぜ込み、産業革命以降の人類社会の発展を語り直すことを試みる。早川書房から刊行された文庫版では、伊藤計劃と円城塔の合作である「解説」という名の創作が増補されている。のちに発表される両者の合作長編小説『屍者の帝国』にも多大な影響を与えている。

75 九龍城砦 / 宮本隆司 著. 彩流社, 2017.7 【YQ11-L132】

九龍城砦は「東洋の魔窟」とも呼ばれるスラム街及び建造物群で、複雑な経緯から香港の一角に生じた権力の空白地帯に、様々な事情によって住む場所を追われてきた人々によって作り上げられた。本資料は、香港返還に伴って解体される直前の九龍城砦を撮影したモノクロ写真集である。外壁を埋め尽くす看板、極度に集積された住居モジュール、暗く湿った空間に走る無数の配管とケーブル。写真は全てモノクロだが、色調が圧縮されることによって、むしろその威圧感を増している。アジアンカオスを体現した九龍城砦は、ギブスンをはじめ、世界中の芸術家のアイデアの源となった。

76 *Cybernetics imagined : Self-control technologies in pre-Dickian American SF* / Kobata Takuya [著]. 大阪大学, 2002 【UT51-2003-E280】

フィリップ・K・ディックは、映画『ブレードランナー』の原作小説『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』の著者で、1960年代以降に活躍したアメリカのSF作家。現実への不安と自己同一性の崩壊に執着した作家であり、その後の文学一般に大きな影響を与えたとされている。本資料は、大阪大学に提出された博士論文で、ディック以前のアメリカのSF作家であるロバート・A・ハインラインとアイザック・アシモフの作品の分析を通じて、

両者が1950年代に発表していた作品の中にディックが扱うようなポストモダン的な主題の萌芽がみられるとし、従来の研究を刷新した。

77 サイバーパンク・アメリカ 増補新版 / 巽孝之 著. 勁草書房, 2012.10 【KS184-M27】

1984年に発表されたSF小説『ニューロマンサー』は、サイバーパンクという熱狂の時代を呼び起こした。本資料は、その熱狂に沸く最中の米国で留学生を送り、サイバーパンクの中心人物たちと濃密な交流をもったアメリカ文学者によるルポルタージュである。

★78 電脳都市 : SFと未来コンピュータ / 坂村健 著, 張仁誠 イラストレーション. 冬樹社, 1985.5 【M57-70】

館内／図書館・個人送信

ソフトウェア工学者である著者が、雑誌『科学朝日』で連載した記事をまとめた単行本。全24章立てとなっており、各章で未来予測、OA機器、コンピュータ犯罪といったトピックを取り上げ、それに対応するSF作品を紹介している。この当時、著者は日本発のOSであるTRONの開発に携わっており、研究開発の第一線にあった技術者の思考を介して、当時想像された未来を垣間見ることができる。

★79 岩波講座ソフトウェア科学16 / 長尾真 [ほか]編. 岩波書店, 1989.2 【M159-E227】

国立国会図書館内限定

機械による画像の認識・パターンの学習、そしてそれらを可能にする脳神経の数理モデル（ニューラルネットワーク）に関する入門書。2024年にノーベル物理学賞を受賞したホップフィールド（Hopfieldネット）とヒントン（ボルツマンマシン）の理論が詳細に説明されている。当時の計算機の能力は低く、ここで紹介された理論を実装できなかったが、計算機の能力が飛躍的に発展した2010年代以降、人工知能の研究もまた飛躍的に進展することになる。編者の一人、長尾真は当館の元館長である。

大阪出身で京都大学を卒業した関西人であるSF作家・小松左京は、多数のSF小説を発表する一方で、関西を中心とした学者・文化人・官僚の交流の中心となり、関西圏における学術文化研究の土壌を築き上げました。その代表的な例が1970年の日本万国博覧会（大阪万博）での活躍です。小松はサブ・プロデューサーとして参画し、「人類の進歩と調和」というテーマの策定に貢献しました。小松の活動を通じて培われた人脈は、後に梅棹忠夫による関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）構想へと発展していきます。§6では、高度経済成長期を背景に急速に変化する社会の中で、あるべき未来像を考え、その構想を社会に実装しようと取り組んだ人々の様子を、当時を振り返る資料を基に紹介します。

★80 巨大プロジェクト動く : 私の「万博・花博顛末記」 / 小松左京 著. 広済堂出版, 1994.7 【D7-E110】

国立国会図書館内限定

SF作家小松左京は、昭和45（1970）年の日本万国博覧会（大阪万博）と、平成2（1990）年の国際花と緑の博覧会（花博）の双方で中心的な役割を担った。本資料は、1970年に書かれた大阪万博についての文章に、1993年に書かれた花博の回顧録を追加したものである。大阪万博ではブルドーザーに例えられた馬力を発揮する一方、花博では周到に根回しを進めた様子がかがえる。この巨大大事業で得た経験と人脈は、やがて関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）に結実する。

81 日本沈没（カップ・ノベルス） / 小松左京 著. 光文社, 1973 【Y81-9583】

大地震が発生して日本列島が海中に沈んだらどうなるか、という思考実験を試みた小松左京による長編SF小説。著者は、SFとは想像力を基に科学と文学を用いて現実を相対化してシミュレーションするものであるとしており、当時は発売されたばかりで高価であった電子卓上計算機（電卓）を駆使し、最新の科学的知見に基づく精緻な地震のシミュレーションを行う一方、祖国

を失った日本人がどのような運命を辿るのかについてもリアルに描き出している。

昭和45（1970）年の大阪万博の開催、昭和47（1972）年の田中角栄『日本列島改造論』の出版、昭和48（1973）年の第一次オイルショックの発生と、急速に変わりゆく日本の社会情勢を背景に、本資料はベストセラーとなった。

**82 日本沈没 / 小松左京 著，李德纯译．人民文学出版社，1975
【XP-A-28878】**

『日本沈没』の中国における初めての翻訳書。後述する『三体』《資料番号86》を著したSF作家、劉慈欣が読んだ『日本沈没』はおそらく本資料と同じものであると考えられる。

**★83 世界SF全集 第29巻（小松左京） / 早川書房，1970
【KE211-13】**

国立国会図書館内限定

古今東西のSF小説を集めた全集の1冊で、小松左京の長編『継ぐのは誰か？』と『果しなき流れの果に』の合本。どちらも人類と文明の関係をSF小説という体裁でシミュレーションを用いて語ろうとする著者の特徴が強く表れた作品である。

84 SF魂（新潮新書） / 小松左京 著．新潮社，2006 【KG561-H132】

小松左京の自伝。有名作品の執筆経緯や裏話だけでなく、奔放な学生時代、多様な分野の研究者や出版業界の関係者とのエピソード、作家以外に体験した様々な仕事、梅棹忠夫の私的研究会「万国博覧会を考える会」から万博の仕事に引き込まれていく過程など、作家としての活動にとどまらない著者の半生が話し言葉でつづられている。著者の創作活動の根底には、戦争や災害

など現実世界での体験があるという。現実とは異なる世界をシミュレーションして描いたSFを通して、現実世界を相対化して捉え、この世界とは何かを考えるのだという著者の思いが、全編を通してうかがえる。

★×85 小松左京研究—SF文学と日本像の再構築— / 徐翌 著。神戸大学，2021 【info:ndljp/pid/12910246】

国立国会図書館内限定

小松左京とその作品についての博士論文。三部構成で、第一部では、京都大学在学時代の小松を詳細に分析している。マンガや純文学など、SF以外の創作活動の内容や特徴を検討している点が興味深い。第二部では、小松左京のSF作家としての活動が本格的に始まる1960年代の小松の作品を、第三部では代表作『日本沈没』を分析している。小松の作品を時代順に追って論が展開されていくが、作品分析にとどまらず、出版業界や、京都大学人文科学研究所の知識人や研究者との関わりといった、人的ネットワークのなかに小松を位置付けようとしている点が特徴である。

86 三体 / 劉慈欣 著，大森望，光吉さくら，ワンチャイ 訳，立原透耶 監修。早川書房，2019.7 【KK491-M16】

全世界で約3000万部発行された巨大SF小説シリーズの第一作。極めて進んだ科学力を背景に地球侵略を目論む「三体人」と、それに対抗する人類との戦いを描く。

原作は2006年に中国で発表されたものであり、2014年に翻訳された英語版がアメリカの政治・経済のリーダー層に高く評価されたことで世界的に注目された。

87 梅棹忠夫：知的先覚者の軌跡 / 国立民族学博物館 著ほか。千里文化財団，2011 【GK146-J22】

平成22（2010）年に国立民族学博物館で開催された特別展「ウメサオタダ才展」の展示内容に基づく解説書。梅棹忠夫は日本における民族学の第一人者であり、国立民族学博物館の初代館長。生態学、民族学、文明学などの分野において、膨大な論文や著書、映像記録を残した。梅棹忠夫の90年の生涯について、同時代人や専門家の論考と、豊富な写真から振り返っている。学問や研究についてだけでなく、小松左京など京都大学出身者とのつながり、大阪万博との関わり、国立民族学博物館の運営についても深く掘り下げられている。

88 動物の社会干渉についての実験的ならびに理論的研究 / 梅棹忠夫 著． 京都大学，1961 【UT51-54-Q1112】

梅棹忠夫の博士論文。梅棹忠夫は民族学のイメージが強いが、学生時代は京都帝国大学理学部動物学教室で学び、その原点は生態学であった。梅棹は、動物が単独でいる場合と群れ（集団）でいる場合では各個体は異なる行動をするのではないかと考えた。そこで、オタマジャクシなどの動物集団の行動を観察するという実験により、集団の行動法則を見つけ出し、それを数学的に（数式で）表現する理論を構築し、論文として発表した。

本資料には、上記の主論文に加え、梅棹が執筆したその他の論文を参考論文としてまとめた別冊も付随している。別冊には、梅棹の民族学の出発点となる、モンゴルでのフィールドワークを基にした論文も掲載されており、自然科学者としてだけでなく、人文科学者としての片鱗も垣間見える。

89 大阪万博の戦後史：EXPO'70から2025年万博へ / 橋爪紳也 著．創元社，2020 【GC163-M18】

大阪万博を中心テーマとしながら、その前後の時代の大阪について記述した資料。大阪万博に関わった人物、パビリオンやイベントなど、大阪万博そのものについての記述も詳しいが、終戦から高度経済成長期、大阪万博開幕にいたるまでの大阪の復興・発展の軌跡をたどる資料としても価値がある。ランドマークの完成やイベントの開催という点から大阪という都市全体の戦後

史を記述しており、大阪万博に至るまでの時代背景や空気感を知ることができる。また、大阪万博のレガシーや、その後の大阪のビッグイベントを振り返り、令和7（2025）年の日本国際博覧会（大阪・関西万博）の構想案も展開している。

90 EXPO'70パビリオン：大阪万博公式メモリアルガイド / 橋爪紳也 監修。平凡社，2010 【D7-J108】

大阪万博から40周年を記念して発行された、公式メモリアルガイド。大阪万博の人気パビリオンであった「鉄鋼館」を整備し、万博記念公園に開設された記念館「EXPO'70パビリオン」の展示内容を書籍化した資料である。大阪万博の開催準備から閉会后までをたどることができる。各パビリオンの特徴や展示品が、数多くのカラー写真で紹介されており、当時の様子を視覚的に振り返ることができる。大阪万博のイベントカレンダーや、パビリオンの図面や面積などのデータ集も掲載されている。

91 EXPO'70大阪万博の記憶とアート / 橋爪節也，宮久保圭祐 編著。大阪大学出版会，2021 【D7-M52】

令和2（2020）年に大阪大学総合学術博物館で開催された、第14回特別展「なんやこりゃEXPO'70 ー大阪万博の記憶とアート」の展示内容に基づいて執筆された論文集。映像や音響・音楽、モニュメント、イベントといったアートの側面を中心に、大阪万博を振り返る。特に、当時の関西で前衛美術グループとして知られていた具体美術協会が企画した、「具体美術まつり」「夜のイベント」などのイベントや作品展示についての記述が詳しい。また、アートと建築、アートとテクノロジーとの関係、パブリックアートといった、それまでの万博には見られなかったアートの視点も検討されている。

★×92 70年大阪万博と日本の文化外交 : 日本イメージ構築に向けた試み / 加畑杏理 著. 大阪大学, 2023 【info:ndljp/pid/13122262】

国立国会図書館内限定

大阪万博において、日本がどのような文化外交を実施したのかを検証した博士論文。文化外交とは、文化の発信や文化交流により、海外での肯定的な国家イメージの構築を目指す活動のこと。大阪万博において、日本はどのような日本イメージの構築を試みたのかを様々な視点から論じている。

大阪万博では、理念的なテーマ「人類の進歩と調和」と、何を見せるのかという実務的な点を周知したコンセプトが共存していたことが特徴であると論じられている。また、それまでの万博での出展では日本の伝統に重きを置く傾向があったが、大阪万博では当時の最新技術を駆使し、日本の発展を示すことを重視したことなどが成果として挙げられている。一方で、私企業への出展要請に対してヨーロッパ諸国が懸念を示したこと、海外広報では日本が意図したイメージを伝える効果が表れなかったことなど課題も指摘されている。

★93 関西学研都市の研究 (立命館大学人文科学研究所研究叢書 ; 8) / 杉野囿明 編. 有斐閣, 1993 【DD83-E286】

国立国会図書館内限定

けいはんな学研都市について、主に京都府域を対象に研究した論集。文献調査のほか、現地調査とアンケート調査を用いて、学研都市の建設過程において、主に社会資本の整備に関してどのような課題があるのかを検討している。

前半は学研都市建設に関係した団体に焦点が当てられ、学研都市構想の背景と、建設までの過程が検証されている。そこでは、クラスター（分散）型の開発により、研究施設や住宅地が合理的に配置できていない点、構想の実施主体が明確でないために、精華町や木津町（当時）といった地元自治体は、立地自治体であるにも関わらず、施設選定や建設計画に主体的に関わるのが難しかった点が課題として挙げられている。

後半は、地域住民の側から、文化創出、住宅やインフラ整備といった学研都市の生活環境について検討している。構想では学研都市のグローバル化を掲げているにも関わらず、地元自治体や生活環境では国際化への対応が進んでいない点、多様な住宅ニーズに応えられていないなど学研都市内の住宅整備が十分とはいえず、学研都市外からの通勤者が多いといった点が課題として挙げられている。

94 関西文化学術研究都市けいはんな学研都市：京都府域の概要 / 京都府土木建築部文化学術研究都市対策室，1992 【Y121-M8918】

けいはんな学研都市のうち、京都府域の概要をまとめた冊子。作成者は京都府で、都市建設計画の目標や特徴が示されている。学研都市の開発初期の資料であり、建設前の計画を基にした説明が多い。地域の自然や文化財に配慮して、クラスター（分散）型の都市建設が計画された点が特徴である。また、インフラや公共施設の整備といった生活環境についての言及が多く、企業や研究機関の誘致・建設よりも、住宅整備が先行して進んでいたことも読み取れる。

95 近畿日本鉄道100年のあゆみ：1910～2010 / 近畿日本鉄道株式会社 著。近畿日本鉄道，2010 【DH22-J937】

関西圏の私鉄である近畿日本鉄道（近鉄）の創業100周年を記念した社史。近鉄は、大阪万博やけいはんな学研都市とのつながりも深い鉄道である。大阪万博では、万博に訪れた観光客を、奈良や伊勢志摩に呼び込むことを計画し、様々な大規模開発を行った。大阪では路線を難波まで延伸し、地下鉄御堂筋線と接続させた。また、伊勢志摩では、「第二の万博会場」を目指して、宇治山田から賢島まで路線を延伸したほか、ホテルやレジャー施設も建設し、一大リゾート地として整備した。近鉄奈良駅が現在のように地下に移設されたのもこのときである。

また、近鉄で最も新しい路線として、長田から学研奈良登美ヶ丘までを結ぶけいはんな線が、平成18（2006）年に開業した。けいはんな線は、大阪メ

トロ中央線との直通運転により、大阪ベイエリアとけいはんな学研都市を結んでいる。令和7（2025）年1月には、大阪メトロ中央線が夢洲まで延伸された。学研都市と大阪・関西万博の会場が直通でつながることになった。

96 けいはんなview : けいはんな学研都市広報誌 / 関西文化学術研究都市推進機構 編. 関西文化学術研究都市推進機構, 2007- 【Z74-G198】

けいはんな学研都市の新たな動きや、立地する企業・研究機関の取組みを紹介する季刊誌。地域の文化や催事情報なども広報されている。展示資料である54号には、国立国会図書館関西館長の寄稿記事のほか、大阪・関西万博に合わせて開催される予定のけいはんな万博についての特集記事が掲載されている。

1990年代以降、情報処理技術は飛躍的に発展し、ついには人間とほとんど区別がつかないほど高度なコミュニケーションをシミュレーションすることすら可能となりました。§ 7では、こうした技術の進歩とそれに伴う社会の変化を、資料を通じて考察します。

本展示では、科学技術の発展とSFの相互作用、そして人類の尽きることのない想像力の軌跡を辿ってきました。過去の夢が現実となり、新たな夢が生まれ続ける。その循環の中に進歩の本質があることを、ご来場の皆様に感じていただければ幸いです。

97 ユビキタスとは何か : 情報・技術・人間 (岩波新書) / 坂村健著. 岩波書店, 2007.7 【DK411-H871】

ユビキタス・コンピューティングの内容や可能性、問題点などについて解説した本。ユビキタスという言葉は、ラテン語で「神は遍在する」を意味する宗教用語に由来する。ユビキタス・コンピューティングとは、1人1台という状態をさらに推し進めた、生活のあらゆるところにコンピュータが存在する状態を表す。本資料では、ユビキタス・コンピューティングが次世代社会のインフラを担う技術であると位置づけられ、著者が進める関連プロジェクト (TRON) などが紹介・解説されている。

98 地球外生物学 : SF映画に「進化」を読む / 倉谷滋 著. 工作舎, 2019.11 【KD741-M2】

SF映画などに登場する地球外生物の生態を、進化発生学の研究者である著者が分析・考察した本。第1章では1979年公開の映画『エイリアン』、第2章では特撮『ウルトラマン』シリーズ、第3章では『2001年宇宙の旅』や『ソラリス』に登場する地球外生命体を題材としている。

**99 普遍生物学 : 物理に宿る生命、生命の紡ぐ物理 / 金子邦彦 著.
東京大学出版会, 2019.10 【RA21-M23】**

物理学者・理論生物学者である著者が、生命の普遍的な性質を物理学的な視点から理解することを試みた学術書。生きているという状態に対して、物理学的に存在し得る「全ての可能な生命」で成り立つ法則があるのではないかという命題の下、遺伝・発生・進化といった生命システムに潜む法則を、実験と理論物理学を用いて明らかにしようとしている。普遍生物学という学問分野を最初に提唱したのは、小松左京『継ぐのは誰か』であり、本資料について「現段階での故小松左京さんへのレポート」であるとしている。

また著者は、本展示の関連講演会講師である円城塔氏の学生時代の指導教官である。円城氏のデビュー作のひとつ『Self-Reference ENGINE』には、「全ての可能な文字列。 全ての本はその中に含まれている。」という表現がある。SF小説から着想を得た概念を学者が探究し、そして新たなSF小説へと継承されているという点でも興味深い。

**100 現代を知るための文学20 / 狩野良規 著. 国書刊行会, 2020.3
【KE173-M25】**

著者は文学を専門領域の一つとする大学教員。本資料は、文学によって現代という時代の何を、どのように知ることができるかという問いを掲げ、中世や近代、未来を題材とした各国の文学作品20点について解説している。第2章「未来と科学」では、スタニスワフ・レム『ソラリス』などのSF小説が取り上げられている。

101 実験する小説たち = Experimental Fiction : 物語るとは別の仕方 / 木原善彦 著. 彩流社, 2017.1 【KE173-L84】

著者は文学・言語学を専門とする研究者。本資料で取り上げる実験小説とは、他の著者による本を引用して、「全ての言語芸術そのものの性質やその存在に関する疑義を投げかけようとする姿勢」を特徴とするものと定義す

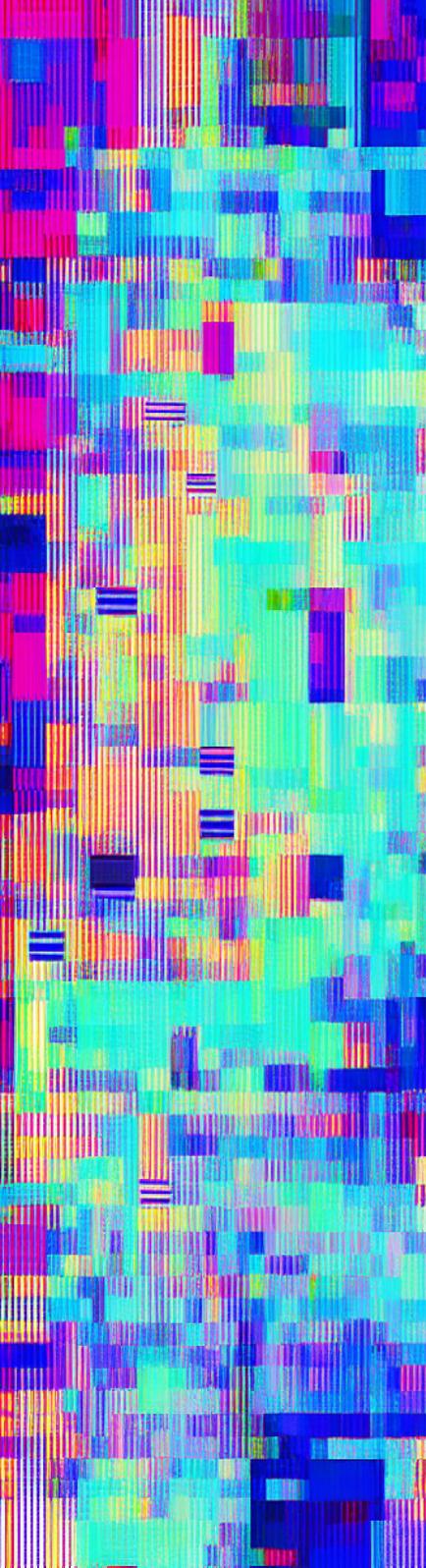
る。本資料では、計17点の実験小説が紹介されており、本展示関連講演会の講師である円城塔氏の短編小説『これはペンです』も取り上げられている。

102 わたしの拡張 : SFプロトタイピングで描く「人とデジタルツインの未来」 / NTT人間情報研究所, 2023.2 【KH971-M42448】

本資料は、2019年にNTT社が発表した「デジタルツインコンピューティング構想」について、同社の人間情報研究所が行ったSFプロトタイピングの成果物。「デジタルツインコンピューティング構想」とは、現実のモノ・ヒト・社会に関するデジタル情報を掛け合わせるにより、高精度かつ大規模な未来予測の実現などをめざす構想である。この構想に基づく研究開発目標の中には、物事のとらえ方や感じ方を直接的に理解し合う「感性コミュニケーション」や、実在の人をデジタル再現した存在が自律的に活動し、現実の本人と経験を共有する「Another Me」がある。本資料では、この2つをテーマとしたSF小説が収録されている。

103 「AI時代」のシン・人材論（第3回）理想の未来を実現する思考法「SFプロトタイピング」 / 樋口 恭介（掲載誌 The21 : ざ・にじゅういち 41 (5) =474:2024.5 pp. 74-76 【Z23-525】）

著者は、ITコンサルタントとして民間企業に勤めながらSF作家としても活動している。本資料は、AI時代に求められるビジネススキルや組織のあり方について著者が論じる連載シリーズ「『AI時代』のシン・人材論」の第3回。SF作品を創作するように、現実世界で実現したいことを自由に発想し、その達成方法を探る思考法であるSFプロトタイピングについて解説している。



会期：2025年2月20日(木)～3月18日(火)

※日曜・祝日を除く

会場：関西館閲覧室

発行：国立国会図書館

編集：国立国会図書館関西館 資料展示班